

暮らし・家庭

くらしのなかの ジェンダー



性暴力をなくすために

NPO法人
しあわせなみだ代表

中野 宏美さん

日々暮らし、生きるなかで感じるジェンダーと人権について考えるリレーエッセー。第1回は性暴力をなくすために活動するNPO法人しあわせなみだ代表の中野宏美さんです。

昨年、アメリカのハリウッド女優に端を発した、性暴力の経験を告白する「#me too」。

「#me too」がここまで大きな潮流となった背景には、性暴力経験者が「#me too」と声をあげねばならないほど、厳しい現実があります。性暴力に関する法律制度が整備され、迅速に適切なケアを受けることができ、加害者が相応の処分を受けていれば、声をあげる必要はありません。

すべての人にできることが



性暴力・性被害ゼロの未来をめざした子ども向けウェブ検定(SHE)を開発したメンバーと(右から3人目が筆者)

そもそも他の犯罪であれば「自らの被害経験を、勇気をもって公の場で不特定多数に告白しましょう」と言われることはありません。「性暴力を経験したんだから、声をあげよう」という風潮

そのものに、性暴力への特異なバイアスを感じます。一方で、「#me too」をはじめ、これまで性暴力の経験を告白してくれた人々がいたからこそ、私たち市民は、そ

の現状を知ることができません。

性暴力を許さない風土が醸成されてきた背景には、告白が真摯に受け止められたことで、これまで「女性の問題」とされがちであった性暴力が「あらゆる人々の問題」として、捉え直されるようになったことがあります。

例えば昨年7月に改正された刑法性犯罪には、超党派の男性議員が数多く賛同し、行動してくれました。また、私が代表を務める、性暴力撲滅に向けた啓発を手掛けるNPO法人しあわせなみだ(※1)は、スタッフの半数以上が男性です。

「#me too」の声を届けてくれる人々の多くは「もう二度と自分のような経験をほしくない」という想いを持ち、ハッシング等による

二次被害(※2)がやまな中でも発信を続け、社会を変えようとしています。

私たち市民にも、できることがあります。LGBT(性的マイノリティ)に対し、当事者ではないが、LGBTが置かれた不利益な状況に異議を感じ、解消を求める人々を「アライ(alliy)」と呼びます。性暴力においても、アライの存在は非常に大きな力になります。すべての人は、性暴力経験者にとっての「アライ」になれるのです。

(※1) <http://shiwasehamida.org/>

(※2)性暴力から派生する、二次的な精神的苦痛や実質的な不利益。「セカンドレイプ」とも呼ばれる。

(第4月曜掲載)